

巻頭特集

元日本女子
バレーボール代表

竹下佳江

2012年ロンドン五輪で日本女子バレーボール
28年ぶりの銅メダル獲得に貢献した竹下佳江さん。
現在はバレーボールの普及活動以外にも、
テレビ、イベント出演など多方面で活躍中です。



【竹下佳江(たけした・よしえ)】

元日本女子バレーボール代表。1978年生まれ、福岡県出身。高校卒業後実業団入り、翌年に日本代表デビュー。「世界最小最強セッター」として知られ、日本の司令塔として活躍。シドニー五輪出場を逃し一度は引退したが請われて復帰後、日本代表で主将も務め、五輪3大会出場。2012年のロンドンでは銅メダル獲得に貢献し翌年引退。2016年、女子初のプロバレーボールチーム「ヴィクトリーナ姫路」の監督に就任。JOCオリンピック特別賞、福岡県県民スポーツ栄誉賞ほか受賞多数。プライベートでは5歳と2歳、2児の母。夫は元プロ野球選手の江草仁貴氏。

子どもなりに、自分の頭で考えて行動することを教えてくれた先生

結婚後、現役引退。出産を経て2児の母となった竹下佳江さん。恩師に請われプロチームの監督に就任したのは長男がまだ1歳の時だった。そして第2子の妊娠9か月までコートサイドに立ち陣頭指揮をとった。チームは女子バレーボールのトップリーグ（V1リーグ）昇格を果たすなど着実に結果を残し、今春5年目を迎えた。その竹下さんの素顔、指導術、仕事と子育ての両立などについて伺った。

ごくごく普通の小学生

小3でバレーボールを始められたそうですが、どんな少女時代でしたか。

外で友達と遊ぶことが多かったですね。父は野球、母はソフトボールをやっていて、小学校の時は子ども会のソフトボールに駆り出されていました。それはそれで楽しかったのですが、チームに入ろうとまでは思いませんでした。

3つ上の姉が小学校のスポーツクラブでバレーボールを始めたので、よく、その練習に行っていました。そのクラブは4年生からのスタートなのですが、私はそれよりちよつと早く、3年生で入部させてもらいました。

指導者は地域の大人で、ママさんバレー経験者の方もいらつしやうかと思えます。活動は通年で、学校対抗の試合があり、地域では強いほうでした。

子どもの頃、なりたかったものや夢は何でしたか。

小学校の卒業文集の話もよく出るのですが、周りが「学校の先生になりたい」「保母さんになりたい」と言ったり書いたりしている流れで、同じように無難なところを書いていました。当時の文集を見てもありきたりすぎて、「めっちゃ普通だね」で終わってしまいます（笑）。

印象深い先生の思い出をお聞かせいただけますか。

小学校5、6年の担任の男の先生ですね。サッカー部の顧問で、すごくスポーツが好きな方でした。学校内の大会では、よくその中心メンバーに指名されました。女子の騎馬戦で大



「小学校低学年の頃はボールをつなぐこと自体が楽しくて。運動神経は普通より少し上ぐらいだったのでは」と当時を振り返る。

将をやれと言われたことも。その時に、「落馬しても君なら大丈夫」と言われたのを覚えています（笑）。

ある時、自分で納得できないことがあつて友達とちよつとしたケンカになったことがあります。とっさに私は、「先生に叱られる！」と思いました。

でもその先生は、感情のままに怒るのではなくて、こちらのお話をまず聞いて、「そういう時には相手にちゃんと謝りなさい」と、筋道を立てて説明してくれました。子どもなりに、自分の頭で考えて行動することを教えて

中学時代からキャプテンを任されたが、自分からやりたいと言ったことは一度もないという。「もっとバレーを極めたい」という思いが芽え始めたころ。



くれたのだと思います。厳しかったけれど愛情も深いその先生のことは、今も記憶に残っています。

より上のレベルを求め、地元を離れて強豪校へ

その後、中学・高校でもバレーボールを続けられました。

中学校では県大会で優勝したり全国大会に行ったり、けっこういい成績だったのです。ところが中3の時、

初めて県大会の決勝で負けたことがありました。その試合は、めちゃくちゃ悔しかったですね。

相手の学校にはずっと勝っていたので、「負けるはずがない」と少し天狗になっていた部分があったんでしょう。相手は私たちをものすごく研究して対策を練って、「絶対に勝ってやる」と必死の思いで来ている。そのパワーバランスが、自分たちとまったく違ったのです。

決勝で負けて2位にはなりましたが、まだ九州大会、全国大会と試合

は続きます。それで、「勝つためにどんな練習をすべきか」を、中学生なりに皆で妥協なく話し合いました。

ミーティングでは、キャプテンだった私が皆の話を引き出す役割。場の雰囲気がかたいと発言しない人が出てきます。だから、人が話をしやすい場づくりについては、この時にすごく学びましたね。悔しさをバネに頑張ったことが功を奏し、チームは九州大

会を突破して全国大会に進むことができました。

中学、高校、社会人とずっとキャプテンをやりましたが、そういう体質なんでしょうか。真面目なので(笑)。

憧れの存在や、具体的なロールモデルはありましたか。

自分の中に、「この人のようにになりたい」という、具体的なものはありませんでしたが、高校ではバレーボールでトップを目指したい、バレーボールを極めたい、という思いが強くなり、地元を離れ強豪校(不知火女子高等学校 現・誠修高等学校)へ進学しました。

私皆と何か違うところがあったとしたら、「もつと上のレベルでやりたい」という意志が強かったことです。というか、単にあきらめが悪かっただけかもしれません(笑)。

五輪予選敗退の経験があつて今がある

日本代表時代の印象深い出来事は?

やはり、2000年のシドニー五輪

出場を逃したことは大きかったと思います。女子バレーボールの歴史上、(五輪出場を逃したのは)あの時だけですから。

自分たちでは「やることはやった」と思っているけど、技術力が足りなかったと認めざるを得ませんでした。その後は、「どういう頑張り方をしたら次のオリンピックの舞台に立てるのか」に集中し、バレーボールに対する取り組み方も変わりました。もしかすると、通らなくてもよかった道なのかもしれないませんが、振り返ってみれば、あの経験があったから今の自分があるのかなと思います。

現役を引退してからはバレーボールに限らず、「アスリートが持つ力ってすごい」と思いながらいろいろなスポーツを見ている。選手が持つ力は偉大で、子どもたちに与える影響も大きいですね。

ただ、選手が最高のパフォーマンスを発揮するには、サポートして下さる人たちの力が欠かせません。ロンドン五輪で女子バレーがメダルにたどり着けたのは、選手と周囲で支えるスタッフのバランスが良かったからだと思います。先生と子どもたちの関係も、同じかもしれませんね。

「私は選手あがりの素人監督だったので、技術指導など任せられるところはコーチに任せていました」とチームの役割分担について話す。



「姫路から世界へ」を旗印に

2016年、新規創設の「ヴィクトリーナ姫路」の監督に就任された。オーナーはロンドン五輪の監督・眞鍋政義氏。いわば恩師からの熱烈コールでした。

現役を引退してからはバレーボールの普及活動や試合の解説などをさせていたが、割とゆったりとした生活を送っていました。そこに、いき

対して熱い土地。初めはかたくなに断り続けていたのですが、熱心な誘いを断り切れなかったのです。

ありがたいことに、私はいろいろなタイプの指導者の下でプレーしてきました。それぞれにいいところもあつたし、「ここは真似したくないな」というところもありました。

なので、監督就任後にインタビューなどで、「どんな指導を心がけていきたいですか？」と聞かれた時には、「いろいろな指導者の『いいところ』をしていきたいです」とお答えしていました。実際には、なかなか難しかったのですが(笑)。

私は、選手にいちばん近いところでいて、現場のいろいろなことを理解できると思っています。でも、選手たちは一人ひとり経験も性格も違い、言葉の受け止め方も違います。だから、そこをできるだけ敏感に感じるように心がけていました。

そして、「どんな言葉で、どのよう」に「伝えれば、自分の経験が選手たちの心に入っていくかを考えながら選手たちと向き合ってきたつもりです。

監督というのは未知の世界でしたけれど、それはそれで、とても勉強になりました。

「姫路から世界へ」をチーム理念として掲げていらっしゃいます。

オーナーの眞鍋さんは、発想が本当に面白い人です。

「普通はこうかもしれない。でも、われわれのチームはこの形でいいんじゃないか？ 常識とされていることを変えていけば、みんなの見方が変わって、それが普通になっていくんじゃないか？」と、「常識ってなんだ？」を常に問いかけています。それが「普通はこうだよな」という、型にはまった固定観念を少しずつ変えてくれるようですよ。

私は土日の練習に子どもを連れていったこともありますが、チームには保育士の有資格者のスタッフがいて、私が指導している間は別の場所です。子どもたちを見てくれました。

もちろん最初に、「ある程度環境を整えていただかないとできません」というお話はさせていただきましたが、私が子育てと監督を両立できたのは、チームが体制を少しずつでも整えてくれたから。それで私の今があります。

選手たちも子連れ出勤を受け入れてくれて、今はそれが当たり前と

子どもにも親にもフラットに。 私も意識していることです

いう感じになってきています。これからは、子どもを産んでからも現役選手を続けたいという人も出てくると思いますから、その受け皿を持つということもチームの強みになっていくと思います。

日本最初のプロチームを立ち上げたことも挑戦ですが、いろいろな面で「挑戦しているチーム」です。正直、立ち上げて間もないので、まだまだ整えなければいけないことはたくさんあると思います。その意味では未知数ですが、もともと面白いチームになるんじゃないかなと思っています。

4年前、わずか選手3人でスタートしたチームが、今、内定者も含めると22人にまでなりました。「数は力」と言いますが、本当にチームらしくなってきたなと思います。

選手たちが試合で頑張っているのももちろんですが、当初、まだ何も無い段階でスポンサーになってくださった地元企業の方々には感謝しかありません。いろいろなところで力になっていただけ、本当にありがたいことです。それは、チームと後援会やスポンサー企業をつなぐフロントや営業が頑張ってくれたおかげです。

昨年(2019年)10月〜2020年1月)は、チームがトップカテゴリー(V1)に昇格して最初のシーズンでした。

厳しい戦いになるといってはわかっていました。若手主体で戦っていたので、これも経験。私たちが通らなければいけない道だということも、十分理解していたつもりです。とはいえ、やはり実際に開幕してみると、厳しい戦いが続きました。

V1残留をかけた入れ替え戦に勝った今回の経験は、若いチームの大きな財産になりました。この入れ替え戦だけは、さすがに自分が選手だったほうが楽だと思いましたが(笑)、選手と違った立場でこの経験を積むことができたのは、非常に大きな意味がありました。

子育てと子どもの教育について

5歳と2歳、二人の息子さんを育てていて思うことは？



ヴィクトリーナ姫路では妊娠9か月までコートサイドでチームの指揮をとった。第2子を授かりたいという希望は契約時に盛り込んでいたという。

長男は、同年代の中でも飛び抜けて体が大きくて体を動かすことが大好きな子です。親が言うのもなんですけれど、スポーツに関してはちょっと楽しみ(笑)。次男は、音楽に合わせ体を動かしたり歌ったりするのが大好きです。同じ男の子でもタイプが違いますね。

男の子二人の子育てはなかなかハードです。スポーツに関して怒ることとはありませんが、それ以外のことに関しては、めっちゃ怒鳴っています(笑)。

身長159cmで世界と戦い、結果を出した竹下さん。
小さな選手に活躍の可能性を示したという意味でも、その功績は計り知れない。



今後の抱負をお聞かせください。

今後ともバレーボールの普及活動を通じてスポーツの楽しさ、バレーボールの楽しさを伝えていきたいという思いは、変わらず持っています。

自分がバレーボールでかけがえのない経験をさせてもらった分、これからもどういう形でバレーボール界に恩返しできるかを考えながら、仕事と家庭の両立のバランスを取りつつ、できることを頑張ってやっていきたいと思っています。

ご本人を目の前にすると「本当にこの身長で世界と戦っていたのか!」と驚きを禁じ得ない。竹下さんはこのインタビューの後、今年4月から、球団副社長に就任、フロントからチームを支えることが発表された。今後は、球団社長のサポートや、これまでチームが取り組んできた女性が活躍できるプロスポーツチームの運営推進に取り組み。チーム立ち上げからわずか3年でバレーボールのトップリーグ(V1リーグ)で戦えるチームを作り上げた功績が高く評価された形だ。今後の活動から何が生まれるか、ますます目が離せない。

※このインタビューは2020年3月2日に行いました。

したことまで報告してください。もちろん、しなくちゃいけないこともあるのでしようけれど、子どものためにといいより、親に対して気を遣いすぎているのでは?と感じます。

先生方には良い意味で受け流す部分もないと、親と向き合うだけでせいっぱいになつてしまうのでは、と心配になることもあります。

親にも子どもにもフラットなポジションで向かい合うために、先生方には、子どものため引きを上手くやっていただければと思います。

私は女子チームですつとやってきました。が、キャプテンとしてチームのメンバーにフラットに接するのはかなり難しかったです。よく「みんなに平等に」と言いますが、怒ることだけではなく、優しくすることも全部含めた「フラット」ですから、常に意識していないと無理だと思えます。どうしても好き嫌いは出てしまうかもしれませんが、それを押し殺さないとダメです!(笑)

小学校の先生方に、メッセージをお願いします。

きれいごとになるかもしれませんが、先生方には子どもたちにも親にもフラットでいてほしいと思います。指導者といえどもやはり人。「情」が出るのは致し方ないことだと思いつつ、私も同じ指導者の立場にあった人間として心がけ、意識してきたことです。

今は保育園でも、先生たちが親に対して「そこまで敏感になる必要があるのかな?」というような、ちょっと

お兄ちゃんにとって弟というのは、特別な存在なのです。保育園の小さな子にはちゃんと優しくできるのに、弟に関してはなぜか接し方が激しく(笑)。それは家でしか見せない彼の姿だから認めつつ、危険なことは「ダメ!」と厳しく言いさかします。私は次女なので、下の子を見ていると「あー、2番目ってこういうところあるよね」というのはわかります。でも、長子というのは自分にはなかった世界。「上の子ってこういう感じなんだ。面白いなあ」と思いながら成長を見ています。